雲窩
雜解
改背今博物筌
春部
四
一五九

春部目録

△印は春三月にあたる季のものなり

○春の天氣の占候の養生の法等十九ヶ条有

△春風　△東風　春ノ一丁
△春雲　△春天　春ノ二丁
△遲日　△紙鳶　春ノ三丁
△春月　△朧月　春ノ四丁
△春夜　△春朝　春ノ五丁
△春夕　春ノ七丁
△春奥　△春望　春ノ七丁
△春山　春ノ八丁
△春野　△春郊　春ノ九丁
△春海　春ノ十丁
△春川　春ノ十一丁
△春雨　春ノ十二丁
△霞　春ノ十四丁
△霞洞　春ノ十九丁
△長閑　春ノ十七丁
△水ぬるむ　△水つく春　春ノ十七丁
△佐保姫　春ノ十八丁
△水地爐縁　春ノ十八丁
△東宮　春ノ十八丁
△雙調　春天氣　春養生ノ十九丁
△春たつや　△春ぬ春　春ノ十九丁

春の雜

此部に春三月ふさはしき色々の雜事をあつめ

春の草木

春の部に入れども正月小閑ひてもなほ草木

△柳 春 北一丁
△芹 春 北三丁
△蕗 春 北四丁
△蕗菜 △菖蒲 春 北四丁
△嫁菜 春 北四丁
△椿 春 北四丁
△蓼 春 北四丁
△蓼精草 春 北四丁
△蔊菜摘 春 北四丁
△蔡菽皮 春 北四丁
△獨活 春 北四丁
△山葵 春 北四丁
△襄荷の花の句 春 北四丁
△三葉芹 春 北四丁
△鹿角草 春 北五丁
△海苔類 春 北五丁
△種植 穀植 春 北五丁
△石蓴 春 北五丁
△鳥の囀 春 北九丁
△鶯 春 北六丁
△目刺 春 北九丁
△百千鳥 春 北九丁
△駒鳥 春 北九丁
△鷽 春 北九丁
△干鱈 春 北九丁
△雲雀 春 北九丁

春の生類

春の部にあれども二月ふも用ゆ

春目録終

春之部

△此印めるい春三月にあたる季へ

春時令

此部より春三月にあたる季へなる季の物をのせ

春風 ○東風 ○春吹風いのどかなるものなり

春風い地下より吹上て地中の生理を発出し曠野青し是春の應なり○

巳卯ふ風あれば其年大風あり

五月西春い南ふ秋い北いりも

東風して雨ふることをよろこぶところ哥い俗説しかぞとよりどころあり春い木ゆり南い火なり南風い時節の氣より相生を成方の風い雨となる故方角より時節の氣と生ずれば晴北い水春い冬ゆり水生木く生をうけよう北風ふけば晴ゆり尤西北の風を乾風とし四季とりふ晴ゆり東北の風い常よい雨になるとし

ども春い北風こそ晴るゝと以て
東北とゆゝども雨よるゝゝ申酉の
風とまぜとゆゝ常に晴とはかさ
どゝふといふことを春い南風こそ雨
とるゝゆへ未申になまべ羊頭と
いて雨よなるゝ

哥　拾遺　躬恒

吹風とゝふいとひさん梅乃花
ちりゝる河そ香いまさりける

同　春風不分処　後京極

おしなべて民の家でも春ぶべき
君が世代はいと長うぜそゝく

詞　朝霧　ゝるぶち。まごち。

能　春風や三條の松々清ゝる　鬼貫

詩　春風　五字對句

煙花宜落日　春風開紫閣
絲管醉春風　大樂下朱樓

詩　春風七字對句　詩礎

只言啼鳥堪求侶　搖春風
無那春風欲送行　野外昏
春風夜動蘿衣薄　度春風
芳樹朝催玉管新　逐春風
霽日滿江寒漏靜　動陽春
春風遶閣白蘋生　待落梅
寒雨送行千里外　任好風
東風沉醉百花前　舞東風

詩　春風ノ詞　高遠

明月斷魂清靄々平蕪歸路

緑迢々 此二句春月人生・莫遣ノ對句ニ出ス

頭如雪縦得春風亦不消 年ヲ

頭雪ノ如クナルヤウニナキ用心アレ
頭ノ雪ハ春風ニモキヘザルゾ

春雲

風と同じ西風吹くと先雲西へ行き東へ行

又降晴とある事風の方角と同じ西南へ行と出雲と
いへ晴あり東へ行と西へ行を
入雲ならば雨なり或ひい東南
東北へ行雲と入るとも雨西北
西南より雲と出るとい晴西南
といへども南へ行未申のあひだ
より雲出ると沖氣といて雨あり

詞 を踏ふまへて花も強の強がるん
るあの岸の花の花のちるを 法皇

俳 さるおびく。おびく。きえまで
さて。くも間。ゆたゆ。雨をも。

春天

詞 のどかなうらら。お霞の月新
ちおてくれいふの霞の月

俳 春の色細きこの月光の月 其雲

詩 春天五字對句 同上

詩 春天七字對句 詩礎

碧落三天外 山川乱雲日
黄圖四海中 樓閣入烟霄

雲斷岳蓮臨大路 樂春天
天晴官柳暗長春 兼煙霞
山河杳映春雲下 拂春雲
城闕參差晚樹中 入洞天

春日

(合) 北山殿　為世

日数い今　数も　かをるざりけり

兼久百首　忠房

かゝる夜をさちこそしようの日のうゝくゝあるかけるうる

(詞) めるる。出る。天はさゝ。新。日数。今。数。かをる。ざりけり。

題をめるしのようけこそ。うゝる。

うゝ　春のしれ　春日　新。霞。むゝくむ

(連) 千里も　春日　宗養

(俳) ひろ　春　鬼貫

千里の日や　春の　砂あゝて　嵐雪

(狂) 見ゝて　柳　橋ふ　都流

伊達　春　千　ゆく　糸山　教二

遅日

永日　暮　春の日

(詞) 春の日　暮

も春の日　右　遅日

(合) 新古今　覚之

我かまの山ふあくかしく

もゝくゝ日　ゝ　ゝ

夕　有家

万葉集

(詞) 夕　春　春　春

(俳) 傘　春

(狂) 柳　の　糸　織　橋

(詩) 遅日五字對句　同上

サイウンタツトコロニタヘ　彩雲歌・處・斷

クルハンキクモ

チヒソツアキラカニサシテテ　遅・日・曙・方・照

ハレタル日

ナンソ　ヘフヘトヘトヘ　遅日・舞・前留

ヘトカヘル

カウサイアハシテタヘナシ　高齋・淡・復・空

ヘヤ

(詩) 遅日七字對句　詩礎

タウゲントウリ　桃源・洞・裏・居人・滿

仙境

キヨジンミチ

シヨウケイクワル　淑景・移

カヘルケイキ

桂林山中佳・日長 仙山

春風・自信牙檣動

遲日・徐看錦纜牽

糸遊 遊糸・春の目のどかな時空を見遣る糸の乱れるやうなゆらめき。陽炎・野馬。日かげふ埃の乱れて馬の走るがごと。○荘子に野馬い塵埃なるかくのごとし

迂春遲・ハルヲマチナカスル

対糸・糸虹

日光遲・ヒアタレバガレ

(哥) 六百番

ふるかへる春のの糸は紫世屋てあるかくこそれてそふるかもん

定家

(三) 新古今

照りもせぬ月もてあそぶ春の夜の撞月よふもくるのぞれさ

大江千里

春月 朧月・おぼろ月 ○春の月い艶なる物ん

同

雞鳴こそ霞めぬ沼もつをそ名うつるもムるる繊月夜さ

源具親

夫木 春山月

むろ山さ春のうけるちゝめいれ月いろろ山さ霞なりくり

入道摂政

同 後九條内大臣

涼き夜の春ろくんいゝ月の春ろ月夜の月いろ

定家

同

たゝ春ぬおぼろ月夜い霞ろて

澄れてそこばくれたつもん

定家

續古今 花落春月

春ろ花の名のうして

春ろ花の月い風もあるつど

家隆

風雅 河上春月

ちるる花の名沼のつろ春なる

川春ろとみて月だかを名る

有兼

夫木

ゝ花ろ春の春ぬ笑ゝ

おゝつ月夜ろ名ろくもん

為氏

同 霞隔月

月ろ霞ぬゝ花の霞の名ぐろまい

宣房

ひろいたあるる。霞のそこ。後ゆ
詞 霞に入る。月。朧月夜。殘の月。のどか。
の月。おぼろに霞む。雲りもやわ。おぼ
ひ春れ。ぬ。ひ。ぬ。ぬ。雪けの月。
かもみの袖。なにかもむ。花ぐも
連 霞ひもも雲こ出ま雲村 紹巴
俳 象に合ひ月殘や朧月 其角

孤雁二邦隔ゝ朧月 十磨
天の涯人月や花の色 宗因
手玉の夜乃月ひ霞むやもほひ 三州

詩 春月七字對句 詩礎

何尹 天明坐・莫辭 懷清霄
カイインテンアケテザナクシヒルヤ オモフセイセウヲ

春城月出人皆醉・月朦朧
シユンジヤウツキイデ、ヒトミナエフ クヒニヨブ ツキモウロウ

明月斷魂清霜々・照野梅
メイゲツダンコンキヨクアイく オホロニカ云 テラスヤバイヲ

平蕪歸路綠迢々・影含烟
ヘイブキロミドリテツく カゲフクムケムリ

詩 春月五字對句 同上

苔澗春泉滿・琴伴前庭月
タイカンシユンセンミチ コトトモヒセンテイイツキ

蘿軒夜月閑・酒勸後苑春
ラケンヤゲツカンナリ サケハスムコウエンノハルヲ

詩 春月詞 劉方平

更深月色半人家・北斗闌干
コウシンゲツシヨクハンジンカ ホクトランカンキ

南斗斜・夜ノ更ルニシタガヒ月モ傾キ星モウツラフトゝ 今
ナントナヤ ヤトヒニシタガヒ シユンキツキ

夜偏知春氣暖・蟲聲新透綠
ヤヘンチシユンキノダンキ チウセイシントウリヨク

窓紗・秋ノ月トチガヒ夜深レトモ
ソウシヤ アタ、カニアリトゾ

詩 同 諸光儀

映門淮水綠留騎・主人心門前水流
エイモンニワイスイミドリトムキヲ シユシンノコヽロ

綠リニ風景ヨキニ オボヘズ馬ヲトヾメタ

潮夜々深・月モ君ニシタガフテ
テウヤ、フカシ 西ニユキ潮モソフネ

夜ニフカクミツルトナリ

春夜 朧夜 天文 ㊀ 續後撰 各義大政大臣

天の原霞のそこ

風に月はうつりて花の香をとる
詞 霞む。山の端。霧む夜。霞。
ぬつ。花。霧。ぬ。匂。霞。
俳 猶やはり人がうるはしく
狂 人目さへそうとやつれ
おぼろ月夜ふかくうのはな可由

春朝

詞 新古今 藤原家隆

霞の月未の松山の
くもぬ夜ふかくうの横雲はそう

詞 春の曙。かすめる。のどけさ。
の朝。霞。霞。霞。霞。霞。霞。
霞。霞。霞。霞。霞。霞。霞。
俳 朝の間の梅の香もまて咲小参斤

詩 春朝七字對句 詩礎

華堂翠幕春風至・曙光寒
緋閣金屏曙色開・送暁鶯
春浮王藻寒初落・月末収

露拂金莖曙欲分・入晨遊
詩 春暁ノ詞 孟浩然

春眠不覚暁天々聞啼鳥春ハ
多キユヘ夜ノ明ルヲ知ラズ鳥ノ夜
啼クニフトオトロキ目サムルヲ
来風雨聲花落知多少ノオト雨風

春夕 春の夕べ

暮春くれの春の末へ

詞 王業 乃子

百ふる多声のどかて遠をの
山の霞める春の日ぐらし

詞 夕べ。暮れ。
夕霞。夕日。
連 梅の香ぞ
俳 淋しさ
狂 山寺の
詩 春夕七字對句 詩礎

綠水殘霞催席散・隔暮雲

畫樓初月待人歸・夕陽遲

小苑迴廊春寂々・散餘暉

浴鳧歸鷺晩微々・目覺閑

春興　春野山を遊びて奥を事あり

(三) 新古今　家隆

ゆふぐれもそこともわかぬ春の色に
花の宿をせばみ乃雪

(詞) 梅。鶯。柳。下萌。若草。ざくらび。野べ

春望　春のおもきい海川野山とも
おりしろくおあのぞむ心へ

夫木　綺中眺望　有家

むさし野のべの草まもあもるふ
そゝにみどりはるもいろれど

(詞) ちろ。霞。霞。もかとむ。かをとる

春の山川。ゆのうれる。詠めやる。
ゆのの春。多めも春花

(詩) 春望五字對句　同上

白雲回望合・城闕千門晩

青靄入看無・山河四望春

(詩) 春望七字對句　詩礎

白蘋楚水三湘晩・樹中分

芳草秦城二月初・春色明

近郭亂山横古渡・景物滋

野莊喬木帶新煙・接人烟

(詩) 曲江春望　唐　盧綸

菖蒲翻葉柳交枝・暗上蓮舟

鳥不知曲江ハ禁中ニアル江辺尤
景ヨキ所ナリ　柳モ枝レ

ケリ菖蒲モ葉サカヘテ夏ヲカタ春モ末ニナリ采蓮ノ舟ヲ催スコロニモナリ更到無花最深處玉樓金殿影參差花チリハテヽタヾ見ルモノハ金銀ヲヌザリシ櫻殿ノカタタガニナルカゲノミゾ

詩　西亭春望　西亭ハ西宮ト同ジ宮女ノ居ル宮殿ハ　王昌齢

日長風暖柳青々北雁歸飛入三省冥春モ半スグルコロ雁ノヨノガ古サトニカヘラント雲井ニトブヘ岳陽樓上聞吹笛能使春心滿洞庭笛ノ音ヲキクニツケテ故郷ヲ慕フ心イトサカヘ

春山

春ハ艸木モさえて山のおもしきおりろさ事うり

忠岑

歌　拾遺

まゝうりの山ぶきのやまぶきの山も霞みてけさはうぐいす

夫木　春山霞　家隆

伏見原の名にあゝる山ぶきのけさもかさみれ春のうり

山家　深山不知春　藤原公重

雪分て外山の谷ぬうぐひすはふりくる里ぬ春やつぐらん

詞　春の山色。山の彩ともむ。遠山うすもむ。霧ぬれもしぬ雲。こえわぬ谷。やまちせ。ひとうぐひす。春の山。とゐり山。山もり。

俳　地つきの山や霞のたちまち　立圃

〈多分ふもとの山ぬ紫柏

狂　四方山ハ霞の衣うりもうと

春のすゝうりろ老宋さ常馨

詩　春山五字對句　同上

緑野明朝日花雑重々樹

青山澹晩煙雪軽處々山

詩　春山七字對句　上ノ句

井轉轆轤千樹曉滿春山花ノサカリ

鎖開閶闔万山春隔暮雲ノカスミ

遠山積翠横海島　五嶺春
殘霞飛丹映江濱　花滿山

㊢ 春山ノ詞　劉商

君去春山誰共遊鳥啼花落水空流
君カヘラバ花鳥ノ風景モモノサビシク流水ノミアリテ物サビシ
如今送別臨溪水他日相思来水頭
今溪水ノアタリマデ別ヲ送リ来後日此流水辺ニ相思ヘトナリ

春野

㊢哥 万葉
春のゝに すみれつミにとこし 我そ野をなつかしみ一夜ねにけり

㊢詞
まくさ。春雨にそむる。ゆきくらし。道乃辺。みどりそふ。むらく。わかな摘。わかむらさき。かすむ野。見わたせば。游糸とり。かげろふ。雲間。ころも。花すみれ。つばな。をみなへし。ひばり。野遊。若草。糸柳。さくら。雉子。雲雀。春雨。梅。柳。雁。帰る。

㊢俳
むしつては捨く若乃麦　来山
春の野やいのちのちる桶　黛山

㊢ 春野五字對句
臺榭春光媚　野竹池亭氣
同上
郊原遠樹平　春花澗谷香

㊢ 春野七字對句　詩礎
聽雞曉關疎星白　落芳塘
走馬春光細柳黃　入平蕪
田夫就餉還依草　野外烟
野雉驚飛不過林　春色深

春郊

春の野乃事ゝ
(三号) 六百番哥合　隆信

ゝ[illegible]人のたゝ[illegible]仏の[illegible]ひきて
別やの[illegible]のたゝ[illegible]のかげる

續古今　　榜本人麿

[illegible]ふ来ゝ[illegible]日の[illegible]の[illegible]をみゝ[illegible]
小ゝ[illegible]がうへふ霞ゝ[illegible]

(狂) [illegible]菜ゝ[illegible]すゝ[illegible]
つむ[illegible]あそひもゝ[illegible]
(俳) 摘[illegible]ゝ[illegible]

(詩) 春郊詞稜粹

水遶江渠漸有聲氣融烟
塢晩来明水声キコヘ野辺モ春ノ
氣令ユキワタルヴ

春海

春いかをゝなびさゝ
海のけしきものどかなる

(哥) 四季百首　　定家

白菜の白しゝ秋も[illegible]
[illegible]ふ[illegible]岩の去れゝ[illegible]風

(詞) 春ゝ[illegible]。[illegible]なる引。[illegible]か
ゝる。[illegible]のしま。[illegible]ふ[illegible]。
浪の花。[illegible]
[illegible]。[illegible]上の[illegible]。緑ゝる。
春の浦ゝ。四の海のどゝ。
(俳) ちゝ紙のゝれをゝ[illegible]海花縣

(詩) 春海五字對句　　同上

月明三峽曉氣清連曙海
(川ノ名所)

海深九江春雲白洗春湖
(川ノ名)

(詩) 春海七字對句　　詩礎

山入白樓沙苑暮渡江春
潮生滄海野塘春遶春流
雲夢夕陽愁裏色染湖波
(所ノ名)
洞庭春浪坐来聲洞庭春
(名地ノ名)

春川 川より梅櫻の水ふうれ
うへすぐ〳〵あらい花の
ちらうらめる俤雪消て水ま
さり〳〵休るゞ紙をもろ〳〵よせり

哥 夫木 公勢

六西川宮の柳のうゑれ棹
わく波まうれる澄さとをうり

詞 春のうら。わのくれ。霞む。雲の
あけぼの。霞おんゆ。ら。くる。氷。鶯
ひとこゑ。せうもくぶ。宮のやまぶき

朋 川そひや鶯もゑ緑のつまえ月 仙鶴

詩 春川 七字對句

詩礎

樹色到京三百里 渡水人
河流歸漢幾千年 逐水平
湘潭雲盡暮山出 盡清流
巴蜀雪消春水來 弄晴川

春雨

春雨ハ音なく忍めやふるる物さひしきこ

良教

哥 建長百首

まこ波のうるびく宮の柳ゆ
うみてうゝるく嶺ゆ花ゆ

新後撰 庭春雨 大政大臣

世ゝ捨る身のかくれゆのふるゝふ
ゝるうへ〳〵のゝ雨のまさ色

夫木 旅春雨 知家

旅衣ぬ濡てそ神よ雨〳〵ふり
雨よりわりぬうるさ色ゆ

詞 物語。くる。雨。ぬれ。そぼ。
ぬく。それ。そぼ。そぼる。かさく
ら花。かさくれて。かくれ。
そぐ。ゆ。衣。ぬる。さ色。さのめ春
雨。雨のゆ。あ川。さ言。ぞ。春雨
めぐむ。雨。雨ゆ。雨ゆ。雨ゆ。雨ゆ。
わゆぬ。雨。ゆ。ぬる。ゆ。雨ゆ。雨ゆ。
を色。ゆ。ゆ。下。ゆ。雨。雨。雨。雨。雨。
ゆ。ゆ。ゆ。雨。雨。雨。雨。雨。雨。雨。
雨。風。風。雨。雨。雨。雨。雨。雨。雨。

糸あり。笠かさ。とるとあへぬ。のぢ笠の雨。傍雨 神代紀上 夕雨 日ぐし。夜雨の炭。雨夜。雨淋き。灯の光りも雨なる。軒雨そそぎ。雨のもの。形の糸あり。形の雫。雨の下雨。旅橋衣。濡るし。笠ぬれ。去る。

笠の春雨。橋の七雨 憲 佳人のさハつ。朱ぬれ。ことゐる。涙雨を去る雨

連 寄雨のおとは山をむしろ。これ汐宗養 寄雨のおとはのきはの竹まふ。紹巴

俳 春の雨花をいそぎの雨待汐宗水 春雨やあるぬ家ふもとん桶來山 けふ雨に花ぬれぬ人やあの夏其角 まち雨やゆたしひきの夏の髮十磨

狂 かきつのり嵐ふる春ぬれそ〳〵ふ さびし〳〵さまはけふ雨中ちらく走帆

詩 春雨五字對句

野館濃花發 海暗三山雨 同上

春帆細雨來 花明五嶺春

霞 △春霞 △初霞 △一ノすそ △霞ノ洞 △霞海 △霞細 △霞汲 △霞衣 △霞袖 △八重霞 △鐘ノ霞 △霞谷 △霞関

△春霞 △初霞 △一ノすそ △霞ノ洞 △霞海 △霞細 △霞汲 △霞衣 △霞袖 △八重霞 △鐘ノ霞 △霞谷 △霞関

仙人の酒を流霞と。△霞袖 △霞衣 △霞汲 △霞細 △霞海 △霞ノ洞 △春霞

右いづれも霞のことく。春の時空中おゝろすて見るゝ如ある。

とりの本字は鶴すす或は蒙とか

連 江方の海はるかやの霞 肖柏

俳 武蔵野の小夕朝一ものの霞ゝ無名氏

山霞のあゝ陸まゝ春すゝ立囲

松をあて花へまそこむ霞ゝ嵐雪

綱ーゝ山はなゝ朝すゝ十磨

晋 夫木 定家

みそゝのい春ぬ霞の立ぬして

沈ぬみきゝゝ霞の白雪

同　野径霞　　仝

春日野のかすみの衣山風の
吹のぶるにぞ乱れそめける

建保百首　海霞　　仝

かぶらの波もてゆくるみやをれ
うるみ山をかすめる浦の

建暦哥合　山家霞　　為家

谷のうぐひすの色あまるまでふ
かしてかけやすしの夕の努

夫木　海辺霞　参議為相

ふる日のうるおきさ波路をう
かるみを出て帰るふねと

続古　朝霞　　家隆

春の夜のおぼつかなきを明ぬ
出る朝日もなほうたむ〜ん

夫木　河辺霞　　成茂

水ぬるやさ〜の柳乃ゆうみどり
うるんのうゑ乃春ゆ〜〜久を

建保哥合　野霞　　順徳院

むさしみやかれうまもうにさく萩の
なうばそかるむ春のむ〜ぎえ

遠さとる。海火がとむ。霞むやや。堀
江の煙もうるぬ。浦く霞む。関関
はとうる。霞ふとぶ。霞とうめ
旅人　森本の柳もうるぬ。風さき霞。
里里の煙もうるぬ。里遠くかとむ。
我とむ里夕霞。河辺の春うたむ。
霞ふむ日ぶ河辺。の柳かとむ。岩根
うすむ。橋霞をとうとも。霞ふ井た
ゆる。霞ふかく。霞て遠き川嶋
日の長用にうすむ。霞を日うる。ゆ春
とをうれうにくふうとむ。ふりう
くてぬ。雨ぬうとをうぬ。霞むふ
多霞。春をくかとむ。花花の枝と
かうと。霞ゆ中に匂ふ春の柳　山本の
柳うとむ。この柳うにむ。霞ふうぐ風
なてうとむ。梅梅の梅うとむ。立
枝もうんぬ。霞の中に匂ふ香。
松風とて松系うとむ。檜原　桜系う
とむ。桜系霞ふうる。花もうる。
必付　春の秋うとうとうとうとう風うる

居所 霞の窓。かすむ新墻。霞のふかく
かくむ。霞む垣根。衣 霞の衣。佐保
姫の衣がとみの袖。旅 霧山のかすく
とけきのかた古里のかすむ。行方 目
かぬ都の山とかくと 無常 霧辺の霞。
山の霞似ても亡き人の 戀 それぬ恋か
通てくる。隔わかる宿の梢かくむ。安
かくりとなりゆゑでそそ

狂 九重と春の霞の日ふ風
なかりてやけふのどかなり　女風

同 あかくて雲のかかれもとりしきれ
なふそぬまへて霞ぐん　法心上人

○詩に作る霞と本朝の哥に
詠ずる霞といちがへり歌連俳に
詠じて春の季に入るは蒙よふ
そのみて霞と誹ど春の比天
氣の霏をいふ又詩にはくわ
霞は朝霞晩霞のるい本朝に
ていあさやけ夕やけの事にて
今いふかすみの事にてはなし

霞 是は詩につくるかすみなり本朝俗にいふ朝やけ夕や
けの事也○日のてるとき東の方
赤しときさへぎる日早くきゆる
は雨ふるとそし一面にあかきは
二三日の内に雨ふるなり日
の入りて西赤く南へうつる
は晴なり○かすみの事委し
くは本篇博物筌といふ書
物にのぶるゆへあらふ略ス

詩 霞五字對句

霜空澄暁氣（サウクウスマシキヤウキヲ）
霞景瑩芳春（カケイカヤクハウシユンニ）
同上
聖藻蚩寒露（セイサウタレカカンロヲ）天子ノ詩文
仙杯落晩霞（センハイオツバンカニ）仙人ノサカツキ

詩 霞七字對句

雲開日月臨青瑣（クモヒラケテジツゲツノゾムセイサニ）官門ノ名
風卷烟霞上紫微（カゼマイテエンカノボルシビニ）宮殿ノ名

詩礎
巻曙霞
晩霞多（ハンカオホシ）

遠山積翠横海島趨紫霞
殘霞飛丹映江湄向晩霞
仙茶

長閑 のどか 暖 温麗 春の日はさむ
きあつきのうれひもなく
天氣ほどよく和暖ふるひ
をゆく麗も同じ心あく百花
咲乱まてうるはしきと云心を詠
(哥) 玉葉 永福門院内侍
をちこちの花乃かゆりもやをえて
ゆる霞のうゑそのゝけさ
(詞) 夕日。書柳。法人。うゝ。眠胡蝶
霞。山の端。空のゝけさ。松。苔。茅
茅。春。春。動。春の日。花。蝶。
谷の戸。出る鶯。柳。糸。
(俳) 付漢風 私みのゝけさ和国の糸
〻〻〻〻や田の中きる苗の一有
水ぬるむ 春の氣そゆるむ心く

水ぬるむ

水は陰氣のゆるのゝく冬さいかくまて氷とゆる春の陽氣を得てゆるむりのこり
(俳) 水ぬるむ 同上 阿誰

(詩) 水暖五字對句
春風增風色 川原通霽色
麗日發光華 田野徧春容

(詩) 水暖七字對句 詩礎
旌旗日暖龍蛇動 居住閑
ハタノモンレヅ〻〻トウコク〻 イツガヒカラズ
宮殿風微燕雀高 雲過遲
宮ノヤナノヌリモノ風ニウヨメク 見レカハ
芳郊緑園春晴散 趣轉閑
ノヘニミドリニハレヤカナリ レツカナリ
復道離宮烟霧生 玉生烟
家ニウスミナトガタツ タマ セイスケムリ

春雜

此部は春三月之比
さう混雜の物とのす

佐保姫（さほひめ）　春の造化の神也

かくちのるにあらぐ

天地の色とあらたまるなりとあり

ふづ（ふ）るなり袖下集に四季

の姫は歌あり佐保姫の吉野の山

に移りて代々を芦わくの山

宣　豆鹿　佐保姫のあらもきさらぎ名も

あらぐ（ら）ぐ春の山の形頓阿

詞　春の両々の風　佐保姫

の霞の衣さ（ま）ぬの神也

花咲山のどうぐ（ぐ）ぐ

俳　佐保姫の家作り也　宗俊

狂　佐保姫の霞の衣ぬぎ

けさ佐さとうの花　走帆

木地爐縁（きぢのうるぶち）　数寄屋（すきや）かこいの炉（ろ）茶人

冬は炉に塗（ぬ）りを用い春は木地を

用ゆ春は自然とやうぶ

塗ぬりそいなうの人

ぐ（ぐ）ぐ（ぐ）を拭（ふ）てぬぐ

東宮（とうぐう）

春（とうぐう）とうぐ（ぐ）を（を）て（て）も春は東を主

宮（ぐう）ぐ（ぐ）うゆ（ゆ）へ季なり（り）いまぐ（ぐ）御即位

なき親王の御（ご）

事と申（もう）を也

霞の洞（かすみのほら）　天子の御位（みくらい）と

ぐ（ぐ）せゆ（ゆ）へと仙洞と申奉るその

御事なり季に用る霞の洞い仙

人の居所なれは日目

出度なく（く）奉る（る）

雙調（そうでう）　春の調子

物と生もる其音は木音（もくおん）なり内裏に

て舞楽ある時春はこの調子なれば

春のあけぼの　（元）雪玉集

いそのかみ

ふる（る）えとう（う）へ（へ）ぬ（ぬ）もの（の）

あ（あ）ら（ら）ぬ荒田のまふあらぐ（ぐ）や　春

あ（あ）ら（ら）ぬ　（元）伊勢物語　月やあら

ぬはるやむかしの

あ（あ）ら（ら）ぬ我身ひとつ

いりうのこふ（ふ）く　春ぞあらぬ

（元）俊成卿百首　まこ（こ）ろ（ろ）ぬ紙鳶の

ぞ（ぞ）ら（ら）に我ひとり　清水地いとり

春養生

素問曰く春三月これを發陳と云て天地共に生じ萬物以て榮ふ夜に入り卧し早く起き庭にひろく歩し形ゆるやかにして志を生ぜし免よ生じて殺すことなかれ賞して罰することなかれ是養生の道也

春天氣

春の初甲子晴き暖い天氣はじめて上巳雨ふれハ春中雨多し此日ごろの事なもあらず春の物のこゝ先なれば年中の豫兆なる事多し殊に甲子ハ干支の始なるゆへ此日の晴雨よべて春の雨ハ歌かも詠如くもゆくと降續くものゝ晴んとそ四方に山の根雲ちぎれ立登るゝ此時風ハ東に替へ又北に吹上て日和かなれハ晴ると云共寒くして四五日の内まゝ雨あり

春草木

此つゝハ春の草木あれ共四加此ろ〳〵ろ〳〵ハ正月の季ゝ用ゆるもの也

柳

△楊 △もかり △もぐり柳 糸の如く枝ゝ垂て水辺に生ず

△川柳 枝ゝ垂て水辺に生ず

△川なし柳 同 △青柳 △青柳

△こゝと柳 △こゝび柳 谷に生ずる山

柳 金絲。白線。点花。弱艸。樹名異聖 △門の柳 五柳先生とゝふ柳の異名とや柳に名づく人〳〵柳と五本ゝてゝろ

△王柳 △風見草 △風無艸

△根水草 △めぐろ柳 初春に芽のいろ

△柳の髪 柳のうつくしきと女の

△柳の眉 美女のまゆに

たとへ美女のらのやうに

△春すゝき 美女のまゆにほそくて

△柳ごゝ

(三百) 万葉 人九

蛙なくむつゝのそこの川瀬なるぎ
緑もそろゝれとあうめ若うを

俊頼

堀川百首

もかう私かつゝ志めなハこゝろうせよ
いつぞひやるぎ風ふきみを落

文治百首　定家

遠くより見みどりなびくかさふるきさと
まこもはかくしの庭乃あれゆくを

夫木　岸柳　伊勢大輔

玉柳のいと乱れ緒くよふひくあさい
こそ一遠くこそらまわりけま

夫木　杜柳　匡房卿

ちくさへてみどりそなへまさごくれ
いとよりかくるまき柳のうり

建長千首　河柳　光俊

せ乱そやこゑかさまそれいこ玉川の
いなぞい柳　えぞぞるゆ乱く

建長百首　水卿柳　仲正

里を紀淀の河を乱うえ西るぎ
やつへちもとりかつ〜せよこら

夫木　水辺柳　家隆

立田川せまちにいあれぐかゝあの
色そ色ちくしに玉乃青柳

同　閑居柳　兼宗卿

紙帝のいろすく柳うちなびく
ちあぐの糸いと乱人りあ一

詞　ゆびく。行くえ。野辺の糸柳。美帝。路立ようてる。乱る人も立とまる。まき柳の陸ふむた。河岸の柳。いそべ柳。沿たひ高。ぬまてゐた。柳の乱てまゆ人。底る乱をゆ深みまぐ人。地蔵の柳。砂とりて乱る。波ふあるを堤。堤乃柳。ぐく柳。うく柳。難まゆ乱ふあ。を。離のそへ。垣かきの柳。垣根乃柳。庭竈柳。門いの柳。たが柳。田門田ふゆびく。糸柳。柳の糸。青柳の糸。柳眉のゆ深れ糸。花見の糸。風糸。うゆ。風吹。うちなびく。柳の枝ふ乱る。春風。柳ゆ。なる。風ようる。風。風吹。柳ふ。風。色ふみぐる。ふまうする髪。柳の髪。風ふぐる。みるの髪。柳の髪。眉みぐれ眉。眉は見。うり柳の糸。眉こより。足立のまゆま。引眉の糸。露糸。玉ぬく。ぬきもる。枝。うぢ。ぬきうぬ

露乃玉。風にみだるゝ。庭 庭かすびく 又庭の糸をぬふ 糸のよみえてう 烟けぶりの柳。なる杏の
柳の糸よりの乱れ烟に似たり またとたかなりもあるなり 青柳 鶯床で
よの柳よう川る 梅 柳が枝も見へ 花
風 枝なりも。柳の糸にねさとめて
哉ども 風よりて 棹姫 姫のろ 又は海の糸ま 見へそう
遠村。誰宿の柳。渡る船の垣根
にほう旅の糸 雨 露吹て。雪をまぐき。
風よれて。雨にみだるゝ 故郷 ふるさとの
みどりの柳。往人もみさき 彩端山 霞又は雪 見るよう
すいく待き 柳のくろくし山 入江の柳。窓の青柳。彩の
青柳。池の柳。青柳。柳はみどり。あ
ひく柳。川柳。恙なら柳。柳乃眉。
柳の糸。めぐり柳。糸柳。柳の髪。
(狂) 春の日の蓋柳しう柳のかを 柳のうこれてむる風乃手 行風
(へ) 猿沢の柳よこの花ありくと 月へもありて蕊みつりけり 常楽庵
(連) ゆくと来るも柳や鷹その美泉 紹巴
(へ) 柳より便やかならし春の風 宗祇

(俳) ちりぬくもけて傾かぬ柳かな 其角
(へ) 傾城の賢なるはこの柳かな 其角
(へ) 芽柳は揺るゝまゝ見えけん 鬼貫
(へ) 川ぞくふけしき落つく柳かな 毯竹
(へ) 朔日二る柳乃翁く匂ひかな 荷兮
(へ) いくも喚風おもしき柳かな 宗因
(へ) 蓬れも麻よりも低柳かな 十磨
(へ) 折ても風さる立柳かな 麥柏

○柳之故事

十圍(ジウヰ) 桓温(クワンヲン)北征(ホクセイ)シテ金城ヲ經テ瑯琊(ロウヤ)ヲ治ムル時ウヘシ柳十囲ナルヲ見テ慨然(ガイゼン)トシテ曰木猶(キナホ)如此(カクノゴトシ)人何ヲ以テカ堪(タヘ)ンヤト云テ枝ヲ挙テ泫(ゲン)然トシテ涙ヲナガス

百尺(ヒヤクシヤク) 隋ノ高熲穉(ヲサナカ)リシトキ家ニ柳樹アリ高サ百尺バカリ車蓋(カイ)ノ如シ父老相イツテ此家當ニ貴人ヲ出スベシト云ヒシガ後果メ宰相ニ至ル

芹(せり) (異名) △根白州(ねじろ) △水英(すゐえい)。苦蘄(くきん) 女葉 (云)新撰六帖 せりのねまろき かんよ名づく

まゝあいふうたゝへてゆく人をりハ
あるまんつまんやせ川のせり

詞 春日野。雪消の沢。流沢小沢。
塩ノ原。昔の人。思ひ出る。接芹
小芹。深根芹。美せり。沢の芹。沢ゐ
雪消の芹。猿の男。砂流やと。ゐ菜
俳 せりつむとこけそ酒をきそへ亦且藁
接ようかうふひまとる根芹 亀翁

浮草 芹 流るゝ芹 其角
うすゐや 稀ゐ咲る芹の花 同

女菜 芹の事なり。一説ハ
せりの外ゐ 別ゐ名ぐと
いふるのあるゝ説あれども
七日の若菜七種。十二種ともせ
ハあれども名ぐの名目ゐ
是と以てこそ時ハせれ異名ゐ
(三) 夫木 猿の女ゐ名ぐ
とゐ名ゐ田の面ゐ畔つゝ
もりの女ゐ山田の名ぐ
者神ゐ

蓴菜 冬至後萌て生ること二三月
莖とおもふ 護生艸とも云

蓴蒿 順和名曰ゐ蒿の和名
かたぐさとあり (三) 夫木

くゐハまて高ゐのおもゐ
ゐべのゐ菜の籾やまもうん

嫁萩 蓴蒿のこゝゐ
(四) の門ハ部ゐ
まぐさ 貢右。ゐ
えさ 色々説あ 三品も同物

嫁菜 雞児腸とも云 (俳) 姑もさて
(五) れ出るゐ 墜露

椿 △玉椿 椿共云 △白玉椿。唐
海石榴 △列々椿 △伊勢椿。
二階椿等別種ゐり数百種ゐり
○山茶・海石榴・椿・らんゐ
皆ゐ訓ぐ尚説多
未ゐ後編ゐ

波薐菜 (異名) 波斯艸。赤根艸
○薐菜。正月ゐ 撮物春喰

穀精草 ○艸 栽星艸三月の内田の中に生ず葉石菖のごとく花小さくして白く光あり星のごとし秋とん

秦椒皮 ○山椒皮 ○山椒の木のかわ

雑菜摘 雑菜とは季の諸の菜のこと 摘む春し田

山葵 山中の水ちかく生ず人家にも作る二月末三月苗生ず

獨活 ○芽獨活 ○風獨活 ○ゆふ名ぐく

俳 風しのぶ人の姿のなつかしさ 絲桐

○一説に二月の季とも云ふ

三葉芹 ○三葉 ○未だ二月苗生ず

喰ふ ○一説に正月ふるる説もあり 又二月ふるる説もあり可考

麝香の花の句 ○麝香の言葉

苔脯 ○海苔 ○海のこと いろく種類あり次に記す

青苔 乾苔もろく味あり ○伊勢多く出る

神代苔 ○あまのり ○石の上に生ず

於期苔 海中石の上に生ず其色紫なり

浅草苔 ○江戸浅草

櫻苔 色黄白櫻の花とちる

松苔 ○十六島苔 雲州多く出る

俳 ○水や何おもてまる苔の味其角

青苔や潮さゝぬ砂利松 天州

注 武蔵の国多摩川の苔 信海

山あゐの深川のもの

神ぬぎて海士のうろこ苔や

ゝるとさゝふてやまんとやする

鹿角草 ○鹿尾草 ○六味菜 ○ひどね

○海中に生ず形鼠の尾の如く色白

伊勢物語 業平朝臣

ゆいあゝぶむぐ此苔に孫りまん

ゑのきりのこの神紙〜つゝも
(二)まゑゑやひきこ抱かの丸し其角

石蓴(三) 若和布ともかく。南海の石ようつゝく生を色青し

海雲(四) 海藴とかく。其形乱れる糸のおゝ〜諸国ゟ出る岸和田并對州ゟ出る多し。俗あやまりてりぐくとゝふ

種植 三月の季なり又晋に蒿苣 旋子 紫蘇 菜茱萸

移栽 正月移し栽るゝ上時ゝ発生の氣を得て能生活する故なり社日過ゟ来月十日ごろ迄の中ゟ〜地氣ゟ月ゟ隨てさゝなりゟ汐を見て もろべ〜氣盛んなる時木の精皆枝葉にあり是を移し栽るゝ其性を破ゟ移し植るゝ紀土を半分入棒を以て土をつき堅くもべ〜上よりやゝ〜ゟる土を加へ地面ゟ二三寸高く〜てゝ土をゝるゝを高く置べ〜ゝうえて後半月など毎日水を灌ぐべ〜。○まゝ木を移し栽る時ハ東西南北の方を木ゟ生ゟ置て穴をかつゝくくひろ〜堀ゟて根のをゝらぬやうに栽べ〜大木を鳥居木をたて〜それゟ根のをゝゟあげてたち根の抓をざゝゝやゝ〜にもべ〜

春生類

春の季なれども(三)如此卯あるハ二月ゟ用也

鶯 本朝〜唐土〜鶯のかゝちぐゝ〜ゝども梅柳ゟゝもあゝて乃雅音いひ〜唐土の鶯ハ大ざ本朝の鳴など有身はをゝれて黄色なる鳥ゆへ黄鳥〜黄鸝〜〜ゝ嘴と足ハ赤羽ゝゝたハ黑又日本のうぐひすハ黄頭鳥〜名付て別物也 舞水の説ゟり

異名 商庚 鶯 黄鶯 楚雀 博黍 黄鳥 容鳥 谷鳥 黄公 百喜 黄鸝 黄鵏 倉庚 花貫鳥 匂鳥 ほとゝぎす鳥 經よこ鳥 歌よこ鳥 きつゝき

連 鶯の明れてくる枝ぶり 紹巴

俳 鶯のなけばいかゞ和歌の浦 其角

鶯の初音や流しゆきを移竹

鶯にしたしみや梅がゝの来山

藏玉 花見鳥の證哥

さいとやひふるゆく山里の

ありまさてゆりふる花見鳥

藏玉 ふるいの鶯きえすそよ匂ひ

梅ハおそ花ハ初をひきつ

定家

丈治百首

鶯の宿ゝめゆるゝれ弁ゝ

まぐさゝ〻れぬるくさ

家集 初聞鶯 定家

あゝ玉の年ハ和歌ゝ

鶯の乳のそゝにさめる鶯

弘長百首 竹鶯 為氏

ゝ〻ゝ花のみゝ花の弁ゝ鶯の

ゝ〻ゝ花のゝちふゝ代ゝ

吉嘉保哥合 旅宿暁鶯

明ぬゝそいそ花ゝ田の山鶯よい

鶯の声やせ花乃笑ゝ

建仁哥合 関路鶯 家隆

雪のゝ白ゝ白川の笑ゝ

あけぬゝの声ゝ鶯乃ゝ名

夫木 雪中鶯 小宰相

おのゝ花ゝ雪のゝ鶯

あけぐゝ雪いゝ乃神杉

同 故郷鶯 行能

鶯のゝ花ゝ乃ゝ

ゝ花ゝ花ゝ

夫木 寒野鶯 家隆

ゝ山谷の鶯

ふけぐゝ雪のゝ

夫木 松上鶯 小大進

ゝ松の緑ゝ

ゝ花ゝ鶯の

宝治百首 朝鶯 為家

ぬれまどふ鶯の竹のはがくれにかゝらちよせてやうぐひすなくなく

金葉 山家鶯 摂政左大臣

山里はうきよのほかをたづぬれど谷乃鶯そのこゑぞなく

夫木 田家鶯 俊成

まほらとぞ秋の色鶯を松ぬれば 啼ぐさまふりきこりの声かな

同 濡鶯 家隆

鶯のはねふきかへせ旅ねうく うち花乃香こそ濡やしたる

(詞) 鳴ず(なかず)ばまつてふうけみをなる。来る(くる)百千鳥。そぶく 鶯(うぐひす)鳴(なき)

雪 雪の木(こ)にこちふ。雪(ゆき)の中に春 まがひてなく 谷 谷の古巣(ふるす)。谷の

声ある 軒 軒(のき)の鶯。新枕(にいまくら)をかへる

霞 霞の中。霞(かすみ)にむせぶ。霞をわけて

朝 朝ねの床(とこ)。ねさへずなく 文 文

ぐれの夢。鶯(うぐひす)のねぐら。塒(ねぐら)をたち

垣根 垣根をぬる。竹 竹の鶯。竹

の中にふりいる 初音 いとも優(やさ)しく鳴

春なれやる 暮春 行春をしたふ。古巣(ふるす)

にかへる 友 友よぶ。友鶯。梅 梅の木にまたらめぐし

柳 鶯(うぐひす)まどふ。鶯。有明(ありあけ)の月になく。

暁ふかく鳴。花にてづくふ 巣 巣をなす

鶯鶯の鶯。鶯の法(のり)をきく。鳥(とり)へ

鳥。今春鳥。鶯(うぐひす)ひとり鳴。鶯の笛

(狂) 張弱(はりよわ)で雪なさはなくは鶯乃

初音経も一部 八合人 次良

梅が枝にそむるの羽でんらくさふ

に啼きおくひめうぐひす 宗俊

(詩) 鶯五字對句

魚戯芙蓉水(ウヲハタハフルフヨウノミヅ)　鶯啼楊柳風(ウグヒスハナクヤウリウノカゼ)　ハチス　ヤナギ

同上

騎擁軒裳客(キハヨウスケンシヤウノカク)　鶯鷲翰墨林(ウグヒスハオドロクカンボクノハヤシ)　イクハンノヒト　詩文ノタツジン

(詩) 鶯七字對句

林間花雑平陽舞(リンカンハナハマジハルヘイヨウノマヒ)　花ハ李従手ガテヒスガタノ如ク

谷裏鶯和弄玉簫(コクリウグヒスロウギヨクノシヤウ)　鶯ノ声ハ弄玉ガ簫ニ似タリ

詩礎

作春啼(ハルヲナクヲナス)

始藏鶯(ハジメテウグヒスヲカクス)

春山鶯啼修竹裏
センカイヌホユハンウンノアイダ
仙家犬吠白雲間
センカイヌホユハンウンノアイダ

詩 鶯詞

唐 鄭暗

欲囀聲猶渋將飛羽未調鶯巣立
サヘツラントハスレド声フロハズカウコハ
飛ントハスレド羽イマダハカロハズ
高風不借便何處得遷喬
カウフウヨリフイニモタヨラニセンケウヲ
齒谷ヲ出テ喬キ木ニウツルヲアリコレモ巣立ノ鳥ノコナレバ風カ手傳フヲナクハイヅレノ處ニカ喬キ樹木ニウツリ居スルコヲ得ナントヽ

詩 鶯詞

鄭谷

春雲薄々日輝々宮樹煙深隔
シユンウンハクヽヒキヽキウジユケムフカクヘダ
水飛カスミウスクタル空ニ日景ノトカ
ナル二木ノ間カクレニ鶯ノ飛カフヘ
為能歌繋仙籍麻姑乞與女真
タヨコウタカツナグセンヤクラコカコヒアフラキノシン
イ能ハ声ヲナスユヘ仙家ノ名籍ニモ
衣カヽルベシタトヘバ麻姑カ故事ノ如シ

囀黄鸝
テンヽワウリ サヘツルウグヒス
送好音
オクルコウインヲ ウグヒスノコヘ

○鶯之故事

鶯梭 梭ハ女の機を織る杼と いふりのく鶯の梢枝を飛ぶる様子のひまるにかの杼と投て機を織る如くかるさかるさとびとびとなるなり

羌児笛 鶯声を羌児の草笛を吹きもてあそぶ ふたとくるそ

秦女笙 鶯の初音のえもやらぬうぐひすを秦王の女子弄玉と云名人の笙のおりろきてなんへうの吉仙家の音樂

仙韶九成 鶯の音仙家の音樂に似たりとぞ

金衣公子 鶯を称美して云詞なり羽の黄色なると金衣にたとへ

鳥の囀 水鳥さへづり并に諸鳥のさへづり皆春之

百千鳥 春はすべての鳥さへづると以てなり鶯

といふことく鶯の名とかける書も有まじいなぐと覚るよう顯

脳の説多くふくらけ鳥或い鳥の千声多ぐしても春るるぐ

(三)古今百子名づる春ハ初ゝに

わゝとあしぐも我ぞふりゆく

(俳)河上の柳の梅の百ちとう其角

目刺 白魚の

竹の串をもつて白魚の目をつゝぬきほして賣へ勢州より専出る

鶯 形鶯ようの太小黒色声琴と調ふ似ようの雄い晴ゝ呼雌い雨とよゝ

(三)駒鳥 頭と左右ふりて形走駒の如ー故ふ名づく春夏能囀

(二)雲雀 日の晴ゝる時い高く上りて鳴ゝ日晴ゝ心そ名づく

(一)干鱈 たくゝれ引ゝるゝ諸國より京師大坂等へ春い多く上りきてる故春の季とするゝ

(俳)干てもぞ艶のきゝや春鱈 東鯉

春の部終

入用字引集 いろは 全一冊

世字引ハ世俗日ゝ入用の文字と撰ゝあつめ考ふ用ひざる遠き文字とたぶゝく故字とひくふ甚もゝやゝく奥の早引多り

須為洲
戸澄
戸妻本
ハ為偽
扱也

梅花堂

文化元年甲子臘月發行
東都 須原屋茂兵衛
皇都 野田次兵衛
浪花 木村良屋長兵衛
岡 仙台横町四丁目 吉文字屋市左衛門版